釋迦御一代記圖會

五

へ次13
593
5

釋迦御一代圖會卷之五

目録

靈鷲山三迦葉大闘魔軍
三迦葉与魔軍闘神通圖
魔種欲妨佛法却密君
提婆蠱惑諸國太子
欲屈世尊提婆墜活地獄同圖
目蓮于活地獄救提婆圖
須達宿月蓋舍拜世尊
須達長者買祇陀園

満地布黄金須達買祇陀園圖

捅神通舍利弗降六道師

舍利弗現大神通挫道師圖

釈迦御一代圖會卷之五

浪華　好苔堂野亭考選

霊鷲山三加葉大闍梨鬼軍

斛飯王の太子提婆達多八浄飯王の崩御を安く大に悦ひ虚空に乗し て釈尊を害し。佛法を破滅せんと広軍を招き高議をる弟六天の王 進み出て曰我曾て佛法の世に行なん事を願ひ達ひ雪山難行の岡 より障碍をなすとも彼如六神通を得し上梵天帝釈四天王其余の天将諸 佛誕垂渠を扶助まで。度も利を得ず。茲に倩考るに今釈迦父の喪に 依て忉利天正寺に在て。諸天将も彼所に在て護持をる。其虚を縁りて 我们八王舎城の霊鷲山に押寄釈迦の徒弟一千五百人の羅漢比丘をも 廃亡し。皇天親を捨主を棄て出家をる不忠不孝の们を罰し如来と流 云さて以後佛道を改依をる者なく自然と釈迦の佛法衰へ我が广道亦 熾ならず。不知這謀計八奈何と云ふ。提婆達多手を拍て大に悦ひ

是技を勇て幹を死の如く斗なり。忽ち靈鷲山に赴き羅漢たち共に殺せんとす。自己八部の魔軍億萬數を領し雲に跨て主舎城の靈鷲山へ飛び赴くる。此時靈鷲山者闍崛山に三加葉大衆を領し富留那なる者世尊に代りて説法し。聽衆に無常の迅速なるを説諭して在ます。倉卒に悪風吹来て満山の樹木を動揺せ乳ば。數萬の聽衆是ハ如何なる天変かやと驚き騒ぎ法話を安捨八方へ離散。已が隨意逃回ぶ。一千五百の僧徒も悶果て。遥に天を仰ぎ見れば。唯視一朶の黒雲發来り。霹靂の音山河を震動させ雷中に奇怪の悪鬼充満せり。或ハ三面六臂或ハ二頭三目或ハ短身長脚。或ハ四手八足其他鮮角剣の如くなるわんぬ。毛髪針の如くなるあり。種々の悪相枚挙るに遑あらず。各牙を鳴し眼を瞋し。兵杖器械を執て群り降るさま怕ろしなんども疎なり。大衆戦慄し。今や渠者ども嘗を喰まんとす。活心地ハなきなり。然ども大河加葉兄弟三人ハ

是を見て早く提婆が障碍せんとも知て些とも怖ず。瑠璃の高座に上り十絶の靈幡を立鐘を鳴し磬を扣て威を示す。提婆達多左右に對渠ハ何者ぞと問。魔種の中に織者有て曰渠們ハ大羯國の優樓頻螺耶提伽閣と云三人の兄弟悉く名を加葉と呼者にて其先仙法を学び火に事し後釈迦が徒弟となりて佛法に帰す。中央なるハ即兄優樓頻螺に大加葉と呼れ。釈迦が十大弟子の隨一なり。今提婆達多朝老年の比丘何程の吏を求に得人。只一箭に射殺すと。今も亦大軍領掌一番に毒箭を放と雨の如し。三加葉猶一箭も動ず。三人ひとしく右の手を開く。三輪の大蓮華となり。大衆を覆て箭を遮るに。大軍の箭悉く飛回りて却て魔陣を射る是に依て大衆狼狽隊を乱して綱と退。二陣の大軍入て猛火を降し。悪風を吹し攻至る。大河加葉持る如意を揮て是を拂ひ。猛火一番に消悪風却て大兵を吹仆す。三陣の

魔頭驚歎し加葉の神通亦侮ゞ〻く進み向ひ雷の如き声を裂て曰魔
什伽加葉多年仙法を学び大ふ事なり何ぞ連年の功労を捨釈迦の妄語
ふ惑されて寂滅の道に入や早く無益の佛法を捨て仙法に皈し不老不死の
道を其んぜよ猶悟ざ我が道を妨げなば身脉髪膚を微塵ふ砕き捨ん
と罵りて加葉天を仰ぎ呵々と笑ひ你潑魔無道の提婆ふ暴られて
我佛如来の妙法を妨んとれども世尊の大威神力ふ弓を引ども早くナ
心を翻して三宝ふ皈依し如来の教化を受よと曰て王此語を聞て大ふ怒り
萬眷属ふ指揮して閑を裂兵刃を雨して攻進む三加葉ひとり身を動せ
ず三個の金剛神と化し各三叉の戟を廻して空中を飛行て軍を拂ふ唯
秋風の木葉を散らす如し悉く雲中へ逃隠る王大ふ憤り巨口を開て大
焔を吐ふ鐵杵を挙て唯一撃ふせんと飛来る加葉本相を顕し一指を
揮て火焔忽ち五彩の花と変じて散落る鉄杵弱輭なる小蓮華と成

れば前の廣言ふも似ず慌忽て逃回ぬ第四陣の魔首入そりて黒雲を起
し百千の雷神を集て電光を閃て攻進む三加葉一指ふ手を挙て虚空を
麾ば旋風吹裂て黒雲を散し氷雨降来て雷火を消ふ是も可ずして
逃退く第五陣の大頭思惟し普通の業ふて八勝ゞ〻く自己身を躍
て百尋の悪龍と化し天ふ飛揚て爪牙を鳴し火宅の如き口を開て焔の舌
を閃て三加葉を侵呑せんと下り来る加葉閃て身を動せば忽ち大鵬
と化し両翼天を覆ひ船を合せ如き嘴を鳴して悪龍の目睛を啄んで
大王大ふ怕き化身を収て逃回る是を見て第六陣の大将萬眷属を領し
て進み至るふ大河加葉如意を挙て虚空ふ描ば唯見大軍の上ふ一大石出現
し藕絲を挙て鈎すり其河二人の加葉如意を挙て空ふ描ば忽然として二疋
の鼠と化り大磐石を鈎る絲を争ひ齧ば大軍の上へ大石を墜さんとを
大軍殺れて慌て逃退く第七陣の大頭衆眷族と倶ふ煙霧密雲と成

三加葉ノ軍と
大小神通と
闘ふを図

天を覆ひ。俄然として世界大黒闇となり自他を見分る事能はず。三加葉等の三箇の日輪と化して天に昇るに。煙霧密雲との大軍となり。世界明朗なること以前に勝り。暑こと焼ぐ如くなれば大軍奮戦して敗退し。第八陣の大王突出して身を動をよと見へるに忽ち一大神と化し身材七十五丈両足二坐の山の頂を踏ぐ跋扈し。瞋まる眼は浄破璃の鏡を懸るごとく鼻は嶮峻なる山と疑れ血池に一般なる口耳根まで裂開さかぐる利剣を植たるが如く生出吐息虹に彷彿たり。大加葉公は大に怕ぢ身を動ぐ増長天と化し身材百丈七宝の大冠を頂き明々たる円光を肩十二種の無量相を具し方天戟を回して大神と戦ふ一千余合大王遂に敗色を顕はし逃退く。如斯大軍術を換へ攻れば三加葉方便を変じ破り一七日の間挑み闘へども佛徒の神通勝れば提婆遂に気を屈し大軍を率ひて自国へと引退たる。義に於て一千五百の大衆三加葉の神通廣大なりとて

讃歎せぬはなかりけり

魔種欲妨佛法却窮

却説釈迦牟尼世尊は忉利天正法を在て父君浄飯王御追福の為且は諸卿官族の為に諸善万行の功徳附属の絶法を説ぐ憍曇弥好容芙蓉の三夫人鹿野瞿陀弥の二新宮感慨の余り如来に願ひ瑠璃の髻を切て戒を受て女僧となりぬ。三千の後宮婇女も同じく剃髪染衣の姿となりぬ。然るに善悪は車の両輪のごとく信心善行の人々には事易く。斛飯王の子提婆達多は霊鷲山の争ひに加葉に為に挫れ無念骨髄に徹し。猶も佛法に怨せんと魔王外道を集て。佛法破滅の謀を議ずる。故に魔王が曰はく。釈迦の法を妨げんとする神通を弄び眷属を厲まし。迦葉釈迦を害せんとの謀ぐ。凡を慎を信心堅固にして一念を乱さず。故に毎度勝事不能。茲を以て我熟思惟するに何率方便を以て渠が心を鎮らせ其慢心の生ず

虚ふ乗〻〻害せざるもの釈迦〻うるも縛〻人吏難〻じ。提婆ゞ曰。此論甚〻ゞ
卓〻。さりあゞ〻其方便ハ奈何と問ふ王ゞ曰今釈迦ハ天正寺ふ在〻絵法をれバ。我
う五百人の眷属を剃髪染衣の姿〻。羅漢の躰ふ紛装せ〻大衆ふまじく
亦一千の眷属を婆羅門の姿と変じさせ〻。釈迦が絵法の聴衆ふ雑らせ。其
経説を讃歎〻出家の望を述〻徒弟となるゝ吏を乞さゞ。彼自然怡悦〻
驕慢の心を生じ多人其間ふ乗じ釈迦を掴殺んと鼠を殺をよるも安らゞ〻
こゝ〻〻貞ふ曰。れゞ提婆達多大ゞふ悦び是究〻妖針なりと〻。五百人の大族
を比丘の形ふ変じさせ〻天正寺へ起らせ。千人を婆羅門ふ化させ〻縛を教天
正寺へ結〻ち。提婆ハ大王と倶ふ隠形の法を受〻姿を隠〻。法座の辺ふ徘徊
〻專〻〻虚をゞ窺ひ。憶呼愚なるゝふ提婆唯是聾者の鈴を盗んとする
ゞ如〻。我の見ふ迷ひ。却〻世尊の神通眼を昧さんと巧るゞ拙り。況
釈尊の獅子の高座ふ上り〻因果観面の理を述比喩を設〻絵法〻ふひる

ふ。妖魔佛弟と変じて大衆の中ふ紛まゝ人或ゞ婆羅門と成〻聴衆の中ふ雑
る。賢〻是亦提婆ゞ法を妨んと謀まるゝ〻ゝと知らなゞ〻さあ〻ね躰ふ
〻大衆ふ對ひ。ふひ。それ佛道修行とゝ身ふハす善尺魔の障あれバ等閑ふ
て正果を得ゞ〻。因〻信行の法を定むゞ〻。舎利弗目連迦栴延們ハ既
ふ心得〻有ゞ。それゞ。それ〻〻の位を定ゞ〻と穏ふ仰ある。三羅漢佛勅を奉り
大衆を分〻〻三重ふ居なゞ〻せ。偖示して曰。初地より十地まゞ〻ハ声聞と号して十
分戒より菩薩戒無住の行六時の動行有ゞ〻。次ふ一行より十行まゞゝを十二
因縁の修行を立縁覚と号〻。百種の緒戒を改め。六時の動行懈怠なく。別
体無住なゝ。其次ハ定より十定まゞ。得定恵智の四種の徳道を立て。善
提と号〻。六波羅密を行ゞ。六時の動行懈怠有ゞ〻ゝゞと。厳重ふ法を定
〻〻。是ふ依〻世尊。大衆の為ふ戒律経を説ふ。是ゞ降魔の初なり〻。斯
〻大衆ハ法令の如く戒律を守り動行懈怠なく修をれゞ。悪ゞ外道ハまゞ

法律なんど嚴重なる絨を知ざれど面を顔を見合せ案ふ相違せし心地なれども是迄なく大衆のなる戒見まゝふ勤行し或ハ痺を堪へ或ハ欠を忍び行ひなるで可笑た如来ハ明白ふ外道乃情態を知むへども強てえらひおなど勤行の眈戒ゆ〻ふ陀ゆ〻ひ耶ふくも怠る輩ハ信時禁文ゝ或ハ坐位を下坐具を絞り或ハ袈裟を切衣を畳び絨め懲しむふど外道們ハ堪ゝて衣裳を顕し頭を抱へて逃去り且亦聽衆ふ雑し悪ナ們を世る乃説法を空ふ聽て口喧しく讃歎し首を振て感賞しなんど如来乃高坐乃下ふ進こり出ぬ涙を袖ふ拭ひ実難有法乃功徳ふ我們ゞ多年学びハ只後生ふ王侯貴族ふ生まれ濁汁歓楽を究んとの願き難行苦行しゆひふ今如来の教説を承ハりて初て今まで修行せし道ハ解脱真正の教法ふ及ざる事を悟りふ仰だ願くハ大慈如来我們ゞも出家得道なさしむへと飽まで言を巧ふして曰れむ世る其詐謀を知むへども出あゝね体ゆ〻曰実も奇特乃志哉

先戒行をなもゝ〻。舎利弗目連其余の阿羅漢ふ命じて教しむふ羅漢逆師命を領して外道ふ對ひ你們佛道ふ入んと欲せゞ先十条戒を受て其初ハ無食乃行なり一切乃食物を斷一滴乃水飲も飲夷を許さゞ亦睡眠なを許さゞ終結なる戒許さゞ如斯して心を煩事三七日もなるとて千人を別室ふ居しむ三百人乃比丘を立て是を守らしむ坐を起者あるゞ三十杖撃より談話なる者あるゞ五十杖撃。睡眠なる者八百杖撃ゞと厳く令を下しなり。是外道を窘んとのふあるゞ普通乃人も出家なる時ゆ都て斯乃如く出ゞ广族ども案の外厳しき戒行を受初乃程ゆ佛法破滅乃為と互ふ心を厲まあひ金剛合掌して坐禅しなる殊勝なる体ふもてなせども元来飽迫肉食悪食し無頼放蕩ふ生育し者どもなれゞ皆時ゆ〻ハ忍びられ淅ゆふ脚痺剰へ飢渇ふ臨で堪ゝ。矢伸せんとてハ杖ふ撃れ面をとらるゝ亦坐禅をれども。脚をゆ〻腕痺れゞ我を忘ゆ〻ゆ〻ハ策撃ゞ或ハ互ふ噛ゆ〻ゆ〻

やたて八背を擊れ、睡てゝ肩を擊るゝ。殆ど困窮し、堪ゝず、人ゞ逃出せゞ我
ゆくと本相を顕し、雲ゝ攀ゝ這々魔界へ逃回りゝる八可笑もまゝ見苦ゝゝ
守乃僧八是を見ゝ大ゝ驚き、世ゝるゝ渴ゝ有り、顛末を言上ゝ。如来笑ゝ
ゝひ予疾より渠們ゞ障碍せんとゝ来ゝる我知ども佯とゝりてゝひゝり素り
佛一如れで渠們をゝ後遂ゝ善果を得せゝちんと宣ゝゝゞ。大衆們佛智
乃廣大なると。大慈悲心を感歎し、愈信心我ゞ凝しゝる

提婆達多魔惑諸國太子

悪ゝ外道八世ゝる乃嚴戒ゝ悔果提婆ゝ糾へ逃回り息も吐あゝゞ一五一十を
語りれゝ。提婆も今八十糾盡此上を如何せんと洗吟しゝるゝ。亦一箇乃大
悪念を生じ。ゝ種ゝ絡て曰我法性姉顕仙乃幻術を盡く傳受られゝ釈迦
ゞゝゞ滅度せざる國を我先往廻りく。幻術を以く諸人乃心を昧ま。外
道を勸めゝ釈迦乃教を疎ませ佛法を妨んゝ如何と問ゝ王們手を拱

ゝ這謀計大ゝゝ效ゝり。疾々思ひ立ゝと勸るゝより。提婆欣ゝゝゝ悦ひ素
り仙家乃幻術を学び究られゝ老者ゝり女年ゝり霧を發し風を呼
等乃神変自在を弄ゝ本國を啓行く阿支羅鬼國ゝ到り國王頻婆婆王の
太子阿闍世太子を昏迷させんと白髪の老翁と変じ。太子乃宮中ゝ到り見
ゝ石を握ゝ王ゝゝ瓦を砕ゝ黄金ゝゝるなんど神変不思議の術を行
ひられゝ。阿闍世太子大ゝゝ提婆を信。宮中ゝ停く重く饗應ゝゝ
其術を学られゝ又頻婆婆王ゝゝ見ひ是ゝ姪し紀術ゝり。今釈迦牟尼
佛世ゝ出ひ其道を信ずる者ゝ将来の福を得ると。不如邪道を捨
ゝ三宝を信せんゝハと練ゝ太子此吏を提婆ゝ告るゝ提婆ら曰ゝれ佛法
ハ親を捨王を捨。妻子眷族を捨く。寂滅を楽ゝ子孫を断絶せしむる
道なり。邪道是より甚ゝ。ゝれゝゝ我ら道八石を玉ゝ瓦を金ゝゝるの妙
道ゝゝ。國を富し子孫乃栄を営む法なり。豈佛法と雲壌乃違のゝるゝん

や太子又王の妄言を信じ如来の教勿れ。る不明の又王の國を治しめむぐ國財
遂に僧徒の供料に費す。衰滅の基とぞ。早く又王を牢獄に下し御身
王位に即國中に佛法を信ずる者あらむ。盡く刑罰に行ひむとぞ勸めるるぞ
太子提婆ら爲に惑され疾より心魂を昧されて今這大悪言を出て至極
の格言なり。情なく又王を嬰して七重の牢に入れり。后宮韋提希夫人
是を見ひく大に驚死悲く。太子を百般に練ぜを提婆ら太子に繞し
く夫人を獄に下させ其余臣下の中に練言する者は悉く市に出して刑戮
しれで果は維有る風練をる者ゆなく。潛に肩を顰て世を危ぶくり。阿闍
世太子は是を好更し。晝夜淫酒に耽り國政を荒し下民を虐るより國
中大に衰へり。提婆は仕たまたまと悅び。阿闍世王に辭して阿支羅鬼國
を立く矩奢那國へ到り國王頭明王の皇子龍種太子を惑はし。邪法を
勸め佛道を忌世。奢移を究めしく。頭明王を徒陀河といる大河を渡し

く遠嶋へ流させ。それより栴陀羅國へ。鹿仙太子を蠱惑して又阿迦臧王
を繞し。魔柄山と深山の溪へ捨させ。其他諸道を回りく人心を惑し
君臣の間を裂。又子の因を断夫婦を離別させ朋友の交り疎隔ん
所有悪業を勸め。五逆罪を造る者枚挙しるに暇あらず。其統と
ら釈迦國家の仇敵佛法の亡國の源なれば早く釈迦を殺しく災害を除ぞ。と毒舌を鳴しく流言しくり。実に諭うるなら
極悪人なりく。釈尊は天眼通天耳通を以く提婆ら悪業を知覚しむ
ひ心中に思念しめらく。予因位の昔衆生の願ひを充んくに或時は大通智
勝佛と現じ。二十五種の誓を起しく四魔の心を和け。或時は浄光佛と成
て五十二事の誓を發しく。衆生の無明を照しく。是邪の心を鎮めくり
其他万燈佛。燈燈佛。燈明光佛。十二光佛。盧舎那佛。最勝佛。七現五智
三十六尊广河薩化應と今身しく。不断統法の功德を充。仙迦人妓と

化現し衆生化益の為に功を積難行苦行して捨身の骨肉を積ぎ山を築ぎ毘補羅山の峯よりも高るぎし並び提婆達多ぎ為に惑はされる輩成正路に成せしむぎと大慈悲を發しむひ千五百の阿羅漢を從へ广迦陀國を立て先阿支羅兜國に到りぬに阿闍世太子提婆ぎ勸めに依て國境毎に關門を建僧徒を國内へ入る事を嚴しく禁ぎるより守門の監率們世尊の來りぬを見て心中に偶仰されども阿闍世王の責を怕ぎ固く關門を鎖し通しまらじとされども如來の威神力に て關門自然開て世尊の師徒障りなく通りぬぞ監率們悔果法力に威伏せられて唯地に平伏る敬しまる外なり世尊は路を進ませて王城に近著見ぬに城中魔氣熾に立昇り國人労苦窮まる色有れば世尊三五人の民を招て世國王の政道を問ぬに國人們如來の端嚴の法相を見まりて恭敬礼拜し且泣く告ぎるは這國先の大王は賢明の君にして朝政正しく民を撫育し國富土肥ぬに先年一人の仙弱來りて太子に神變奇特の術を教へ佛法を固く停止せ大王並に后宮を捉て牢獄に下し太子自己王位に即淫酒に耽りて政を治ぎ奢侈に長じて國人を虐ぎ是に依て心ある人は他國に移住し已吏を得ぎして國に留る者は皆我們ぎ如く疲困して世を甚ぎ憐れむぬ你們心を労する吏勿まに予今の王の心を和らげ先の王夫婦を扶出し悪政を摶ぎて仁政を行させぎ舍利弗目連の二人を召ぎ你両人城中に入て阿闍世王に予ぎ此國に來る吏を告よ速ぎに必定追退んと王自己城外へ出ぎし其时予广障の為に昏迷せし心を正路に皈せしむぎと命じぬ二羅漢佛勅を領じて神通を奉雲を呼ぎ是に駕して安々と城中に入て正覚無為の如來衆生を化度せん為に這國に來臨して國王を責ぎ城中の上下城を出如來に拜謁して結縁をぎと大声に呼りぎれば城中の人々大に驚ぎて阿闍世王に斯と奏を王世尊の三字を聞

く大いに怒り朕國の四方に關門を建固く佛徒を制禁させるに何國より
来りん朕自已神変力を以て渠們師弟を屢釜に煮し災の根を斷んと戎衣
を身に被懸弓刀を執て軍を領し白象に跨て城外へ押出し前面を眺と
見れば釈尊大衆に囲繞せられ御身は石上に端坐し其白毫の光赫々と
て大陽に向ひ如眼々々定に見る吏能く乗る白象は足を縮め首を
低く進を得ず隨従せし軍卒們も覚ず地に跪て礼拝せり阿闍世王気を
屬し是は後ろと鞭を揚て象を撃ども一すも動を得ざれば心焦燥て飛
下り長鎗を執て間近く世尊の法躰に迫り一声叫んで刺んとせるに忽ち
鎗は鈎針の如く曲り五躰痙ぐ働を得ずさふらふ鐵の縄もて縛られる如く
なれば呆て忙然たり世尊微笑し給ひ善来太子一切如是大怨師諸悪
莫作衆善奉行共益横難と唱へ給へば阿闍世王忽然として夢の覚るが
如く悪心却て善心となり覚ず器械を投捨て恭敬礼拝し合掌して南无
佛と唱るに數萬の軍士も同音に南无佛と唱へる世尊阿闍世王に向ひ
你提婆に障事に依て五逆罪を造るといへども本心より出し科にあらざれば懺
悔の為に其罪消滅せり急ぎ父母を獄中より出し不孝の重罪を謝すべ
しと命ぜば阿闍世王深く慚愧し朕妖賊に瞞れ骨肉大恩の父母を獄に
下しる人も如何なる心に有ると號泣し先世尊の師弟を城中に請て供
養し即同に牢獄を破却して父王母夫人を出し頭を破り血を出して罪を
謝す頻婆婆王韋陀夫人太子の本心に還しを深く悦び是偏
に如来の大慈大悲に依りて世尊に拜謁し厚く法恩を謝し種々の絶物
を献りて茲に於て世尊國王父子に為て父母報恩經を説三世因果覩面の
理を示し給へば頻婆婆王に夫人太子諸臣下に感涙をとどめる深く
三宝に帰依し髪を剃て佛弟となる者三百余人受戒する者數を知ず世
尊も歓喜し給ひ國王に辞して阿支羅兜國を立矩奢那國へと赴給ひ

欲冠世尊提婆墜落地獄

斯く世尊ハ矩奢那國ゑ至りおはしまし方便を以て龍種太子を善心ゑ帰せしめ顯明王を遠嶋より迎還させ。广柯般若經を説き諸人を教化しおはし夫より瑯舍國ゑ立ち寄り盍仙大子を説諭し梅陀羅王を深谷の下より扶出させ其余提婆が惑乱せし國々を周行く悉く惑ひを解く教導ありひそれで其國々の國王國人ともに佛恩の廣大なるを覚ると三宮ゑ心を傾けざるハなかりけり。然るゑ提婆達多ハ此度を安く大いゑ憤り。此上ハ我釈伽ゑ近付て刺ゑ切害せんと。劍を懐ゑ隠しく女年と変じ。其頃世尊ハ摩竭國善勝道場ゑ在く説法しおはしける。雲を跨く刹那が間ゑ道場へ到り。聽衆ゑ雑りく世尊ゑ咫尺しまつり。説法も終り聽衆の退散をるを待忽ち本相を顕し劍を抜く世尊を刺ゑらんと走りかゝるゑ俄然として大地裂烈そと焔燃出るゑそ大ゑ驚た急ゑ退くもとゑ足の踏所大穴となり。其中へ墜落し猛火の為ゑ身を焦され叫んとすれど煙咽を閉く声出ず茲ゑ於て神通自在も絶を度無す。遂ゑ活ながら奈落ゑ陥り地獄ゑぞ入ゑる。阿難恐人く驚ゑ對ひ提婆達多ゑ造る所の罪無量なりと雖正しく如来及び弟子們が後弟なり。如来無縁の衆生ゑ対ゑ救ひおへり可憐大慈悲心を垂て彼を地獄中より救出さらむへと願ゑる世尊曰凡素り佛因あれで救ひ得さるべけれども罪科ゑ深重なり。哉糾の呵責を受ゑもあるべ今罪障消滅をべきを〻肯ずおはせ。阿難可難猶も提婆を憐を救を需ると二日ゑ及ぶゑ目連ゑ告て世尊ゑ向ひ弟子願くハ地獄へ赴き提婆を諫め懺悔せしめ給へと。世尊曰阿鼻地獄へ墜落をる同を人間の音を解をる吏能りぞ你到るゑ其甲斐ゑ目連曰弟子と六十四音ゑ通じ能く提婆ゑ説ら。渠解せざるゑ吏いよ〻〻強く望まより。世尊徐く約束目連捉び神通を以て早く阿

鼻地獄ゑ到り。空中より提婆達多と呼。牛頭馬頭空を仰ぎ〻曰。そも者提婆を呼ぶ何事をうなゝあゝや目連ゞ曰提婆如来ゑ冠ぶ〻〻活地獄ゑ投せり阿難可難們原を憐み救を乞ふ止ぶ見ゑ依く我如来の免を得ゝ這所ゑ来きり。你們早く提婆を將て来れよと命ぶ獄卒ゝ曰達多ゞ罪深重なれど若干の呵責を加へ已ゑ粉骨碎身せり。今女問待ゑ〻對面き也進せんとゝ鐵の組の上ゑ咬咀ーたる骨肉を銅の箕へ盛ーいれ活そと呼ぶゝよびれど忽ち提波多ゞ形容となりぬされども猛烈肥大の身材古骨の如く渡義〻顏色青く憔悴ーくきも苦ーげゑ焔の息を吐居たり。獄卒虛空を指さ〻你彼尊者を怨や否やとり其呵達多空を仰ぎれど佛弟目連淨雲ゑ駕ーて立ち達多涙を潛然と流ーる者俯く願くハ我を救ひおへと曰目連ゞ曰你嫉妬の心深く。佛法を滅せんゝ且諸國の太子を惑ーゝ五逆罪を造らせ捻も悪念を改ず我佛如来を弑ーまつらんとも。其罪障無量なれど生ゐゝゑ阿

鼻地獄ゑ投せり今你ゞ猶如来を恨ずや。提婆泣く曰我貪瞋癡の三毒の為ゑ心の明鏡を曇せ如来の妙經を信せず。因果應報の統哉嘲りしゞ今活地獄の苦患ゑ逢て初く佛統の虛妄なるを知。千悔されども返ぶ一度阿鼻地獄ゑ墮落さよ。呵責を受ること無量なり。或ハ熱鉄の金中ゑ投入さ〻。我身躰を煮爛ー或ハ鐵の組ゑ咬咀ー或盤石の臼ゑ搗或ハ銅叔ゑ入れ絞り其他火車ゑ責乗られ劍山ゑ追登され朝ゑハ紅蓮の氷ゑ身を裂れ夕ゑハ焦熱火の焔ゑ身を焼る。其余百千の苦患二六時中息を吐の隙もあらぬと。皆是自業自得果ゆく。他を恨んやうなく。唯願くハ我ゞ者大慈悲心を垂く我を救ひ今一度娑婆へ回ゑ佛足を拜ーて多年の罪を謝ーまるゞ〻ーとく。血の泪を流ーて啼哭ーれど目連歎息ーて曰你罔浮ゑ在ー同へ威萬人の上ゑ出筋力よく大象を搏ども今阿鼻の罪人となりてハ弱草を拔力もなく。鳥雀ゑ欺るる。是你ゞ罪你を責るなり你因果の理を悟り。

心三宝ニ帰依セルナレバ我汝ヲ救ヒ得サセバ提婆目連ハ足ヲ拜シテ
曰若シ者我ヲ救ヒ阿鼻ハ若患ヲ脱ヒシ者ハ誓テ佛弟トナリ薪
水ノ労ヲナス。永ク世ニ事ヲ為ルベシトテ天ニ向テ誓ヲナセバ目
連憐ミ獄卒ニ向テ曰達多ガ罪重シトイヘドモ如来ノ従弟トシテ已ニ先非ヲ
悔テ佛弟タルベシト誓今ハ何責ヲ恕シ給ヘ獄卒ガ曰是我ガ預ル所ニ
非ズ森羅王ニ謁シテ乞ヒ給ヘト告ルニ目連頓テ森羅殿ニ到リ冥
王ニ謁ヲ冥王目連ヲ見テ恭敬礼拜シ来ル者何等ノ事有テ駕ヲ辱
シ給フヤト問目連ガ曰提婆達多先非ヲ悔テ佛弟トナリ人天ヲ望ム願
クハ法王渠ガ罪科ヲ許ス。閻浮ニ回シ給ヘト乞レバ冥王掌案判官ニ命
生死簿子ヲ捜ス。ムルニ斛飯王ノ子提婆達多壽四十五ヲ過ルトアリ今達
多四十二才ナレバ猶三年ノ生命有ト奏ス。是ニ依テ冥王目連ニ對テ曰
提婆ノ悪逆其罪重大ナレバ一大劫ヲ経ルトモ恕ヲ乞ル所ニアラズ。目連

者光駕ヲ枉テ乞ヒ給ヒ依テ渠ヲ恕シ給ヘ。目連ハ再ビ悪
心ヲ生ジ三宝ニ冠ラルニ於テハ再度阿鼻ニ墜落シ永劫浮ム期アラベカラ
ズ。目連者能ク教誡シ給ヘトテ即閻ニ鉄札ノ罪名ヲ削捨テ冥ハ目連ヲ厚
ク謝シ奉リ冥前ノ呵責場ヘ回リ提婆ガ身躰ヲ採テ倶ニ浄雲ニ乗神通ト
共ニ一瞬ノ間ニ世ニ在ル善勝道場ヘ回リ来ル世ニ目連ガ提婆ヲ
伴ヒ回シヲ見ル人如何ヤ達多你因果覩面ノ理ヲ悟ルベシト同ジ提婆
怕ル〳〵佛足ヲ拜シ我邪見愚昧ニシテ如来ノ妙教ヲ侮リ阿鼻地獄ニ
落ル数箇年ノ間無量ノ呵責ヲ受ケ初テ佛説ノ端的ナル我知ル願クハ
昔日ノ罪ヲ赦シ我ヲモ法弟トナシ給ヘト涙ヲ流シテ告
ル。世ニ微笑シ給ヒ你ヲ見テ天上ノ一日ハ人界ノ十年人界ノ一日ハ地獄ノ
十年ナリ。汝ヲ你ガ阿鼻ニ墮落セシ間ハ纔ニ三日ナレドモ呵責ヲ受シ
三十年ナリ。故ニ善ヲ修シ佛果ヲ得ル我上知ル。悪ヲ擅ニシテ墮獄ス

佛勅ふつちよく
目連活地獄もくれんくわつぢごく
提婆だいば
図

る式下愚とせり。早く三宝に皈依し出家得道せんと宜ひれど提婆感泪に咤即坐に阿難を戒師として僧となり名を調達と改め是より信心堅固に持戒して末遂に阿羅漢果を得たり。斛飯王此事を傳聞て大いに先非を悔自己遥々善勝道場へ往て罪を謝し如来を自國へ請じ重く供養し種々の施物を献り佛恩を報ぜられるにぞ提婆太子の新宮にぞ妹女臣下に向て迦盡し如来の戒を授り出家する者男女千人に及びり。調達其后三年を経て命終し戒行の功力にて天の樂界へ生じ給ふ是偏に佛道修行の善果なり信ぜざるべからむ事

須達宿月蓋舎拝世尊

茲に舎衛國に一人の長者あり名を須達と呼り家富栄て北斗を支ぜり。財宝を積貯へるが天性夫妻ともに慈悲憐愍深く孤獨貧窮の者を恤み財宝を散て救ひ眼に善を修せるを楽しむ。故に國人挙て其德を称

一号て給孤獨長者と呼り。此須達長者に七男子あり。已に六人まで家財を分つて脩身の役を為しるる。第七の男子は殊に端正美質なる上智才すること衆に勝れ父長者夫婦に比て寵愛し天晴此者の為には天下に雙なき容顔美麗にして才芸に秀たる婦を娶んと普く國中を尋求るとて

ものいはざる是を我が子の妻にせばと思ひ上女もふり乞食客の婆羅門のうち廣才の者に命じ。你諸國を周徑我が末子の婦に具る処才色兼そなへたる女を擇来りいへと托しれば。婆羅門領掌し修行者となりて諸國を廻り。往て王舎城に到りて這國に一個の長者あり名を月蓋と呼り是も家富豪なる吏須達に劣らず。曾て善勝道場に詣て世尊の説法を聴聞し。深く三宝に皈依し僧尼及び修行者に事て米銭を施せり。然る所に須達が婆羅門月蓋長者が門前に立て鉢を呼王舎城の國法に人に物を施さず婦女を以て与るなりひなれば一人の女子に米銭を盛て携へ出て修行者

ホ与婆羅門此女女を見るホ年八十三四なるべし。天乃ケ廿ゑる美貌玉を欺ク華を羞ーむる國色有ーなれ大ニホ悦び我長者乃命を得て諸國を廻り。歳許の女を見たれどもいまだ斯程乃佳人を見ざ渠を長者乃末子の婦ホ娶るとも愧べくむなしと思ひ女女ホ礼をなーて絶息を謝ー。你ハ主翁乃子なりや亦ハ侍女なりやと問女女ガ曰妾ハ主翁乃児なり。何ガ故ホ問ヲ婆羅門ガ曰我你乃相を見るホ大福德人ホ嫁ちる表あり。然れども其期を過る時ハ福分滅ーて大貧窮乃者ホ嫁ー且余短ー我甚ダ是を惜ク。你ガ父家ホ在ズ我面會ーて其期を教示すべーと乞女女稚心ホ誠と称ひ裡ホ入て又月蓋長者ホ斯と告れば。子を如親心福愛ゞて禍となるべーとの紛ホ逐ひ僕を遣て修行者を迎入ーむ婆羅門迎乃者ホ從て長者ガ殿ホ昇リ。先礼を厚ーて拜ーれば長者急ホ礼を回ーて上坐ホ請ー。道師先我ガ女兒を相ーて我ホ示ち所ありと曰ふ願くハ高教を示ーたへと乞波羅門ガ曰今愛実ホ天下ホ比類なき美貌なれども若是を王者乃宮妃大臣乃妻妾ナ〻ホ具人と世ズ。必ず短命なるべし。唯大家と等く富豪ホ〻〻大善根乃長者乃子ホ嫁ちる長命無病ーて福德限りあるべーと。我先月舎衛國を修行ー時彼國乃大善人給孤獨長者の許ホ數日止宿。彼長者ガ末子を見るホ年記十七八歳端正美貌ーて智才又萬人ホ勝れり。我其才色具足ーを愛ーて婦有や否やを長者ホ問ふ。長者ホ答ふ意ホ合婦あらざれば娶ずと云ひ今熟ーホ大家乃令愛を彼須達ガ末子ホ配偶せば是天縁ーて鸞鳳乃匹ーも謂つべし。若婚議を結む人と云ハ我媒妁をなーと乞ホ任ずて統ふホ月蓋素リ須達ガ富豪ホ〻〻大善心あるを傳聞其人ガ慕心深れば。大ニ歓喜ー我も兼て彼人乃大名を聞キ若其令息を女兒ガ婿とちる事を得ば幸福何事ガ是ホ過ん這國乃卿相我ガ兒を娶んと乞人多れども皆不善人なる故ニ我敢て肯ずて其輩我ガ須達長者と親を結を安ん。何なる計巧を設て妨んもとくれ

を事火急ふ於ざるふ利あり。僥倖ふ我商賈乃義ふ就く明早より家人を舎衛國へ到しめんと欲せり。道師願くハ彼長者の我ら舎屋へ駕を枉らゝ乎ら文書を造り与ゑへ長者ふ贈りて光駕を促し親婚乃吏を商議せんと望むおぞ波斯匿門諾しく。微細ふ書紀して与えれば月蓋文書を作りつゝ家人ふ托し。須達へ贈りむ。家人命ず領しく舎衛國ふ到り須達ら幷ふ往く文書を呈しれば長者是を披ひられば。彼波羅門が書ふて月蓋が女女を擇得ざる一五十を書されば。大ふふ悦び即同ふ旅裝しく王舎城なるふ月蓋長者ら幷ふ到り。初ゝ面會し。互ふ素情を述終りく酒宴を催し月蓋愛女我ゝ陪酌ふ侍しむ須達此女女を乃るふ波羅門が書ふ紀せしより猶十倍勝し美女なれば歓喜ふ勝ず。依ゝ親を結び婚議を約し醉を盡しゝ其夜ハ月蓋が客殿ふ止宿しゝ。茲ふ手夜の頃不図目と覚しく安ふ。家裡乃男女飲食の器を著く扨あつらへ大食懇の准備をなす体なれば心訝り想道月蓋我が為ふ饗食懇乃設をなをとも數人乃器ゆく吏足ず紀ふ數千乃食器を取あつゝハ何乃科ふやと不審さゝふ晴ず。翌日月蓋ふ對しく其故を問月蓋答く曰明日ハ如来及び阿羅漢を請ずく供養せんと欲るが故前夜より其設をなせり。定めく長者乃眠を妨げゝと謝を須達が曰如来とハ何人をゝや。月蓋が曰君いまだ知ずゞや。摩伽陀國浄飯王乃皇子悉達太子降誕乃日天地乃間ふ三十二乃瑞相を現し。萬神盥毘尼國を傷護し太子生ながらふ歩むこと七歩。右手を天ふ指左手ふ地を指。天上天下唯我獨尊と唱へ三十二相八十種好を具足。成長ふ隨ひ学ずして萬藝ふ達し。十九ふして宮中を出檀特雪山乃霊場ふ難行苦行する事十二年。終ふ一切智を得ゝ無上正覚乃如来と現ず。十八億萬乃魔種を降し。三加葉月連舎利弗以下神通廣大乃波羅門道師皆徒弟となり。諸國を回りく一切衆生を済度し。今已ふ三千五百乃比丘三千八百乃比丘尼優婆塞優婆夷ハ數を尽ず。今這國

善勝道場に在て法を説むとて依て我明日如来師徒を請て供養せんと欲
せりと一五一十を語り終て須達長者額を撫て大に歓喜し我如何なる福縁
有てか愚男が為に絶世の美人を得且多年渇望せし大聖釋尊を拜奉る事
を得ると悦び勝ず猶も月蓋が舎に止宿し事如来の光臨をぞ相待ける
茲に釈尊八月蓋が請待に應じ十大徒弟十六羅漢其余百千の弟子を従
へて長者が館舎に来臨し給ひ主翁の為に妙経を説給ひ其後供養を受
用し給へ須達始て如来の説法を聽聞して隨喜の涙を流して信心肝に銘し
佛足を拜して告ていはく初て本覚如来の法顔を拜し妙説を承りて胸の雲
霧晴ぬれば煩悩の夢も覚ひぬ但し慈悲萬行の如来普く四天下を周往
して有縁無縁を化度し給ひたまふ我が舎衛国へも玉駕をむけ給ハざるハ如何なる
佛意にやと問まる。世尊曰汝が不審さる事なり。抑舎衛国ハ国王ちゝ兄卿相
下民ちゝ邪道を信じて三宝を嘲り謗る故に予いまだ汝が国に到ず須達涙

を流無て曰願くハ大慈大悲の如来一度佛足を舎衛国に運ひ邪を滅し法を勧
て国人を化度し給へ。一国の福田と滅心面に見れて願くハ世尊の黙首を
ひ汝が大善心ハ予是を知り。然ども出家の法ハ在俗と異なり。説法をべた精
舎を建て到らんと曰ば須達大に悦び愚老が家に貯る財宝を竭て精舎
を営ミ給ひ。若精舎成就せば如来法駕を促し給へと問まる。世尊諾
し給ひ汝説法をべき精舎を造りなば予速に到て国人を化度をべし。須達が曰
ても如来の住し給ふべき堂塔ハ如何なる地位に建ぬべき。愚意に弁へがたし
願くハ法弟の中地形を擇て精舎の廣狭を指揮し給ふべき阿羅漢一人を
借給へと願ふ如来実もと思召。誰を遣ハさんと思惟あるに舎衛国ハ多く婆
羅門種の邪道を信ずと雖ども原婆羅門に神通廣大なる者を遣ハさんバ
国王を屈伏せむること能ハじとて。十大弟子の中舎利弗を召出し給ひ仮須達と
倶に舎衛国に赴き精舎を立べき地位を擇て。堂塔の數量を指揮を

ゑ〜と命じ給ふ舍利弗依然として領掌し須達と同道して舍衛國へ赴く

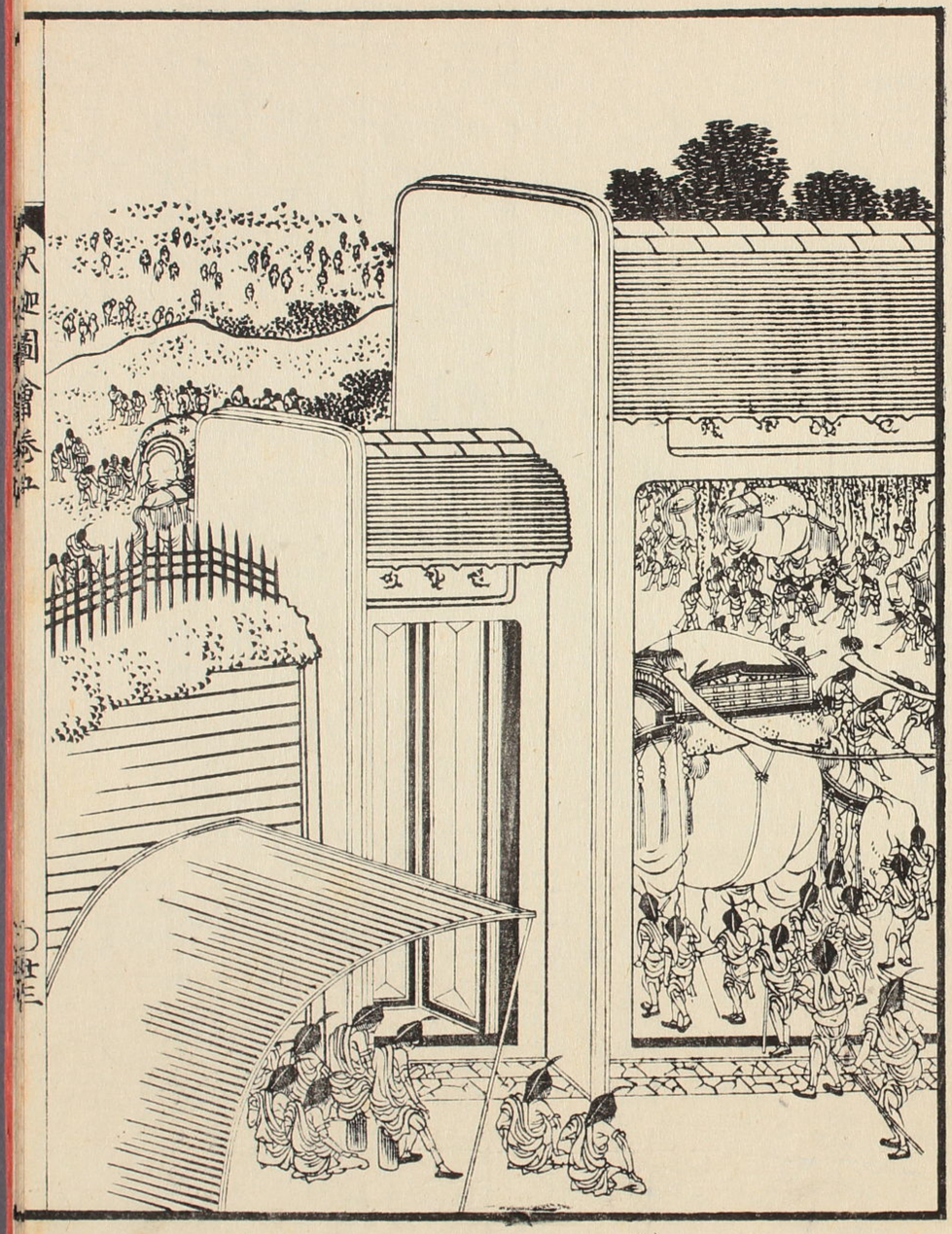
須達賞祇陀園舍利弗降六師

斯て須達長者八舍利弗と俱に王舍城を立て舍衛國をさして回りくるゑ世尊師徒の休足おはしまゑ科ふとく巧匠を雇て二十里毎に尊舍を營立て飲食の器まで調へ置日を待て舍衛國の我が館に著眷族を集て舍利弗を拜せめ齋を設て重く食應し其后舍利弗と俱に普く國中を周りて精舍を建ゑ地位を求るに舍利弗が意に可地なし余りに求るに舍衛國の大王波斯匿王の皇子祇陀太子の園に至る舍利弗此園中に入て見るに土地平博にして樹木蔚茂せり然も王城より遠からず近からず最上の地なれば舍利弗心に合須達に對て曰這地域に如来の法意に可ゑの地なり其色へ若王城より遠ければ托鉢修行に労頃なり亦王城に近ければ喧鬧して説法の妨あり因て精舍を建立るに八這地に勝るあらず須達頭を搔て曰這園自余の者の所領なれども買得せんと安からず是八國の皇子の莊園なれば甚だ購得がたし何乎余の地に精舍の地位を擇ぶ舍利弗が曰我爰に你と國中を見廻れども佛意に可ゑの地一所も有事なし鬼も角もて這地に精舍を建いとふに須達已事を得ず承伏す翌日太子の宮中へ伺候す四方八隅の物語を後釈尊の法德を讃歎す這國に精舍を建如来を請じて國民に佛説を聽せ善を修して國自然安寧なるべしと祇陀太子が曰我も此意なれば須達に如来光臨あり事なし是を奈何とせんと太子が曰何の難事あらん何方にも國中に空地を需め精舍を建て招ぐべし須達首を揮て曰否然るに精舍の地王城より遠からず近からず樹木繁茂し平正の地なれば佛意に合ひぬ小人國中の地理を考へに太子の莊園に勝るべなし願くは彼地を小人に賣与へむと乞太子曰我這國の太子として錢財を惜まず彼園は九の道遥遊戯

の地ホ〻敢く他余ホ繊ぎ〻長者ガ曰。逍遥娯樂ハ一世の樂〻精舍を立如来の化度を受ル萬代の幸福なり太子の御游の地ハ彼園ホも限いま。枉く小人ホ賣与まゝと再三再四懇望〻く止ざれど太子ゝてあゝ心中ホ思惟〻ルハ渠斯まぐく懇望ゝとも價拔群ホ貴く賣人といそぐ望を斷ざ〻とく。須達ホ向ひ你さるぐホ九ガ園を購得んと欲せど彼園ノ地を黄金を以く布満すノ余地も残さぎんど其黄金を以く園地を賣与ざ〻長者歡ぐ曰。王者ホ戯言なし。小人ホ三面リ園地ホ黄金を布く購ひ取いるゝとく。坐を起私宅へぞ回リる。太子大いホ驚ク丸素リ園を賣ノ意なしとゝくど。渠ガ望を斷ん為ホ價を貴く云ルホ豈ゝらん渠猶屈ゝる色なく領掌て回るざ〻とハ。是ハ如何ホゝるゝと心地惑ひおひるるホ流石ホ約定せ〻一言を違変せん吏も然ハど。廣大ノ園地なれど富豪の須達なりとも。よも彼地を布隠ゝ程ノ黄金ハ貯へ得ざと唯長者ガ財ノ足ざらん吏をぞ祈られる。須達長者館舎ホ回リく倉廩を開ク。數億萬ノ黄金と五

頭ノ大象ホ負せ祇陀園ホ到リ地ノ廣さ幾量ホ凡八十頃ホ向ケリ即ち數百人の下僕を分ち自己指揮て満地ホ黄金を布〻むるホ。五頭ノ大象ホ負〻ゝるる黄金ホく猶不足ホ二頭ノ大象ホ黄金を負来らゝく一すノ地をも見さず遂ホ満地を布隠〻れバさゝも廣大ノ祇陀園も金光日ホ映ざくさなら金色世界ノ如く〻る者目を驚〻驚歎せざるハなりき。祇陀太子ハ疾より園ホ来リ須達ガ黄金ノ數量を〻るホ七頭ノ大象ホ汗する許ノ黄金を負せ来るを〻く心懊悩〻斯てハ此者遂ホ九ガ園を買取ざ〻。如何せんと思ひ煩れるが肱と心付よ〻や須達満地ホ金を布満るも猶歳萬株ノ樹木あり。是ハ約定の外なれど是を以く拒ゝるゝと念居られるホ今已ホ満地ホ黄金を布終リたるを〻く不覚嘆息〻。斯無數ノ財宝を拋く釈迦ノ為ホ精舎を造営せんと欲を〻ホ須達ガ信心を以く考れど世ゝるノ法德弘大なる事推く知ざ〻。不如九もこの園地ノ樹木を悉く世ゝるホ寄附〻。須達と倶ホ精舎を建ゝ。将来の福を祈

須達長者無數の
黄金を拋て
祇陀太子の
園を買



ん不かるべく。茲に初めて大善心を発し。須達に謂て曰。汝已に満地に黄金を布き園地に你に賣るに。隨意に如来に寄進せよ。然れども樹木を免ぐ所有なきぞ。九きを是を世尊に寄附せるべしと。あるに。須達躍上て大いに悦び。斯の如くなれば精舍成就せんと。何ぞ心を労とるれや及び。たくさん堂塔造営の高議をる所に忽ち月盖長者来り呼ばて曰。公等のみ大善根をなすこと。あれ我に一辟月の力を添る事を許せよと望む。両人其由を問。月盖が曰。園地は是須達絶手より。樹木は是太子絶手より。我は工匠を雇て堂塔を造営するの絶手とあらん。太子須達大いに悦び。三人相倚て須達が家に到り舎利弗に面會して精舍営を乃高議をなす。茲に六人の道師あり。皆仙法を学び神通を具。国王も乃卿相に重くする信せれるが須達長者祇陀太子と心を合せ。釈迦を為に精舍を営と建んとするよ。我ぞ大いに怒り相議して曰。這國に精舍を造ること。我が道忽ち衰滅

とぞ。不如大王に絶く精舍造営を停止せんに。如衆議に致して。六師命く波斯匿王に見て奏して。祇陀太子須達が女言に惑されて。瞿曇沙弥を信じ精舍を造営して渠を招んとす。是大いなる大國の費に。義乱の基に。願くは大王太子に勅して精舍建営を停止し。須達を捉へて重く刑に処と。只我ら告れば国王曰。朕が浄飯王の子釈迦が法義人天を化度し功徳廣大なりと。百國心を傾け四天下皆渇望とす。是に依て朕も一向釈迦を清しく其説法を聴んと思へり。然るに無益の道なれば聴に及ず。太子が造営我に停止せば。唯憾らく朕卿が修する道と釈迦が修する道と何ぞ勝り何ぞ劣る。吏を遣て心茲に疑惑せり。是を奈何せん。六師の首領労度差と云者席を進て曰。是何よりも最安。吏を遣て今須達が舎に止宿する舎利弗と云比丘。佛徒数千の中より抽でられ。這國に来る釈迦に劣ざる手段ある者なる。我が渠と法術を揮ふ。若舎利弗勝て精舍

造立を免許せん。將我們勝で造立をさゝ止舍利弗を追回し玉へと奏す國王是を
聞き給へ。此義然るべしと内意あり。即因ち官人を召て須達を王宮へ召き六師が願ひ
旨を云聞せ法術を捕るゝより命じ玉ふぞ須達長者大いに驚て這吏如何有
んと思ひながら王命返さゝと能ずで領掌し快そうてぞ退出る

捕神通舍利弗降六師

斯て須達長者ハ思ひよらぬ王命を得て心樂しまぬ。懊惱を抱て私宅ヘ皈
り来るに舍利弗長者が不快の体を見て其故を問須達が曰小人今日王宮へ参
内いたして國王の宣る信の六道師と云る者と法術を捕る者勝負を猜舍
造営を行さゝ。若六師勝で猜舍建立を停止をゝの王命なり彼六師ハ
皆猛悪なり且神変不測の術あり。云る者ハ是正法惡眼の佛弟子渠們が邪
術に負ぬ。太子及び小人が大願一朝の霜と消人吏の憂ハ心樂しまぬと
絡る。舍利弗笑て曰。汝ハ長者ハ正直老実の人なれ心を安んじて捕術の領掌

を告ん。彼六道師如ハ乃者祇陀園の草木の數ほど来るとも我が此腕ヘ生ル
一根の毛髮も動し得じとぞ。然ども云放つ長者猶心穏なられと意中ヘ想道
此人平素ヘ柔順なく仮ヘも大言せざるヘ今這大言を放つを必ず彼六師ヘ勝る
手段あるなるべしと再び王宮へ参り舍利弗が術捕領掌の旨を奏し彼
斯匿王さゝ其准備せよとて官人ヘ命じ城外の廣ク地を擇ませ罪ヘ場を
結高座を設し。偖國中の人民へ今日より七日の後這地位ヘ集て婆羅門六
師と世尊の徒弟舍利弗と法術を捕るあり。隨意ヘ看ん見と觸られる
國人們這吏を聞く。是ハ珍し見事なと挙て其日を待る。斯て程なく
定日ヘもかりれば波斯匿王を始めとし。祇陀太子卿相宮妃般々の下官ハ
捕術場ヘ至おの〳〵設の座位ヘ着坪の四面ヘ國中の貴賤老若幾千万の
數を知ず。雲霞の如く群集して立錐の地をも残さず。勝劣いまだ相待
る。因ヘ守門監率金の敲を聲が東の門を開く六人の婆羅門數十人の徒

弟を牽て。場に入て坐に著其時まさ銀鼓を擊て西の門を開く舍利弗須達長者を從へて徐々と歩み入り給ふ殺の帛に著。看事の緒人東西の勢を見るに六師は悉く羅綾錦繡の衣を穿ち。意気揚々たり。舍利弗は只麻の法衣布の袈裟を身に纏ひ勢ひ微々たれど衆人嘆息し。可憐這比丘僧よりも争ひを好ず。六道師が為に如何なる辛苦を受らんとそ。ひそめあへり。裡號令の鐘を鳴しれば六師の中にも特に神通廣大と宣へり。労度差は坐位を起寛大に歩出し。畢竟が徒弟来まよと呼其時舍利弗は対問を待に。労度差が曰やあれ舍利弗仏が師又瞿曇汝彌は妖怪の愛生ぞ。胎内に居こと三年母親の右脇を蹴破て出生し。早く不孝の罪を犯し。剰へ高恩の父を捨て邪道を学び天下の人民を惑し。君父を捨妻子を捨。嗣を断族を絶さの道に入む是不忠不孝の教なり抑我が這舍衛國の君臣賢明に釈迦が邪説を用ひど。我が真正の道を信ず君臣父子の倫を乱さまど。迦に唯須達と云る至愚の國賊あつて。釈迦が妄語に

瞞れ。太子に勧て這國に道場を開人と欲を是迷ひの甚だしれど。大王に羨し。今日這場に於て仏と我術を揃へ明らに國人に道家と佛家と何生う真なる吏を知まと欲せり。仏う術勝ば積舍を立る吏を紆を見。若我に及ざれば須達は九族を滅し。仏は骨を移し肉を泥と為ん。但し術を揃ざる以前に非を悔て罪を謝し。なぞ。幸に一命を恕し放ち飯りやん。三思て加へて答をなせと罵りそ。舍利弗は天を仰ぎ大に笑ひ。それ伽綾頻迦乃今ちるを皮て。燕雀も搏り。我ら音猶頻迦より微妙なりと想ふて。仏は凡眼を以て見る所也。我佛如来乃妙法を不忠不孝の道とも。或は邪道とも。おりふぐし。是麒麟の生虫を喰はざる哉。射狼の笑が如し。所詮仏が們と口舌の論は無益なり。仏術あらば絶せよ。我盡く是を破るぞと事申なげ。答れば。労度差は大に怒り。悪死比丘が廣言を。ぐ我が本尊を見せべと。眼を閉て文殊念れば場乃中正に一株乃小木生出そう。雲霞乃緒人目

と瞬くして眺居るに。衝々に長大となり。枝繁り葉を増。見る〳〵中天に生上り
日影を覆ふに繁茂し。花咲菓を結ぶを衆人あつと感じ。実に希代の神通
なりと讃歎をる声女時に鳴も止さりける。舎利弗是を見て。右手を揚て天を
指させた。俄然として旋風吹殺り。労度差が大木を根ながらに吹抜地に倒る
微塵となりぬ。衆人是を見て再び感歎。這般の術捕舎利弗なる者勝
と賞誉も。労度差気を苛。再び呪文を唱まだ。忽然として場中に池水現し
周りの巌石盡く七宝を積重ね。奥に種々の妙花咲出る。舎利弗亦指をムス
く虚空に描き六牙の白象出現を。一身長大にして牙の上毎に七茎の蓮花
生じ。其茎毎に七人の玉女坐せり。件の白象池辺に歩寄り。湧溢る池水を
一滴も残さず吸盡せば。玉女は神を祭く花木を拂ふ。池も花石も霜のごとく
消白象は雲を踐ず天に昇る。労度差二度の不覚をとり忙然として再び
神通を弄す能はず。是に依て諸人舎利弗這度も勝ると誉称す六

師の一人拔迦耶といふ者。労度差に換り場に進出。言の向者もなく。捻鈦念咒
結を唱ると忽ち一座の大山湧出。泉滝樹木草花盡く具足し。山上に一宇の
堂塔あり。皆七宝を以て荘厳せり。諸人是を見て嘆美する所に舎利弗
天に描く数丈の金剛杵天より降り。金剛杵を揚て山を一撃されば。
大山砕け散て雪の如く消失る。拔迦耶怒て亦咒結を唱まだ。一個の龍池中
より出現を。一身に十頭あり。麟角を鳴し爪牙を鎮し。虚空に飛騰し大
雨を降し。黒雲を鼓雷電天地を震動せれば。衆人恐怖して戦慄せざる
舎利弗も驚かず一念されば。唯視一羽の金翅鳥飛来て。龍を掴執て裂
喰是に依て雨霧雷収り白日皎々たり。衆人心を安じ。舎利弗が勝を賞し
其時亦六師の中より迦里闍といふ者。拔迦耶に換り進出。捻鈦念咒結を
唱れば。俄然として一大牛出現を。身躰肥壮にして。麻足利角あり。大に吼り地
を奔ること疾風の如く。舎利弗に向て角を揮て衝来る。舎利弗又一念されば

舍利弗大神通を
現して六師等と
闘ふ図

巨大の師子現じて大牛を齧牙にみて分裂して喫盡す。是に依て迦毘闍
の勝叉餘を引退く。又六師の中より耶羅伐と云者進み出身を動して夜叉
神となる。身材十四五丈頭上に火燄眼中赤して血の如く四牙長く利にして眼光
日月に奇し。諸人是を見て怕まざる人なし。舍利弗も亦身を変じて毗沙門天
と化し。身材二十丈三叉の戟を廻して夜叉神と鬪こと數十合夜叉神力疲れて
逃んとする時猛火燄出て東西南北路あらざる耶羅伐大に怕き木杓を頭に
冠る者恕し給へと叫む須臾に猛火消舍利弗假杓を收て本坐に帰る六師の
中遅屠斯賓鳩羅の二人を勝ぐれを知て出合ず茲に於て舍利弗身を躍
して虚空に昇ること尺餘ばかり。端坐して空中に身上水を出し身下火を出
し東に沒し西に現じ北に隠し南に現じ或は身を百丈にして跏趺し或は身を
小にして宛轉し或は身を合して一身となる其変化究
りなし国王太子卿相より無數の看者感嘆に勝へず誉る声百里の外に

徹する紆余さに我慢の六道師も舍利弗の神変奇特を見て屈伏し各
前の罪を謝し奉る者如来に願ひ我が仏弟となり給へと望れ従隨
せし徒弟も俱に得道せし事を願ひ舍利弗善哉々々と是を紆結し
場中に高座を設て自己是に上り衆人の為に本行宿福の因縁端的なる事
を示し。比喩を設て佛道の甚深微妙を說き。聽衆無明の睡を覺し
て感涙に袖を絞りぬ。斯て說法畢れば億兆の聽衆歡喜踊躍して已ら
隨意に去国王太子臣下と俱に舍利弗を請て城中へ還り給ひ。種々に供養
し金銀絹帛を布施し給ふ舍利弗恩を謝して王宮を退た須達が舍に帰り
て後太子たちも須達月蓋と高議し。五百數千人を率て祇陀園を剪ひらた
伽藍造営をぞ始めける

釋伽御一代図會卷五畢